

浙江方面に倭寇は活動したが、中國に於いては正平二十二年（一三六七）朱元璋が「明」と建國して、多年中國を悩まし続けた倭寇の禁圧を日本に求める情勢にあった。南北朝争乱期中南朝側の西征府や、菊池氏の兵の強靱な武力の背景となした財政や軍需物資の供給者は倭寇であり、懷良親王に加担する松浦党であった。幕府の公貿易船（造明船）も天文十八年（一五四九）を最後とし、日明の国交は断絶していったが倭寇の跳梁は益々激しく、明國でいうところの嘉靖の大倭寇時代と現出するに至った。弘治元年（嘉靖三十四年一五五五）明國は鄭舜功を正使として、倭寇禁圧を求むるため豊後に派遣して来た。以下久多羅水先生の研究を要約して紹介しよう。

何故豊後が遣使地に選ばれたかについては不明であるが、当時大支義鎮の南蛮貿易が盛んになっていたものであり、舜功が府内に着いて義鎮に謁した時のことを万里長歌の一節に「策馬往いて豊後ノ若に見カ」とある。

鄭舜功が豊後を登って帰國するとき、義鎮は佐伯莊龍護寺の清授（別名一説あり）を正使とし、野津院到朝寺（現在野津所ノ国道十号線沿いに寺屋敷跡あり）の清超を副使として同行させた。

清授等は琉球を経て広東に到り舜功と離れて、潮州の海上に至つた時弓兵を蒙り、批文を毀滅されて遂に獄に下された。舜功は人と広東に遭り救われぬが、舜功も亦幽禁されて果さなかつた。清授は妄りに典例を引いて謬るところがあつたとして四川の茂州に流謫された。

当時揚宣は既に退き、胡宗憲が總督となり庇護の有力者と失つた舜功は「媚嫉に罹り身と縲綑の獄に墜か

る」と嘆じている。さきに四川茂州の治平寺に抑留された清授は、三年に及ぶも尚抑留かつづいた。感懐に左の作あり。

感懐

每憶扶桑額在哀 旅愁三載苦何為
 杜鵑無奈未啼路 啼落批頭雙淚垂
 遠來忠信本無私 上有天知人未知
 日月掛空輝万里 天主何不化東□

留別鄭回客

長橋楊柳館離情 每憶君恩淚暗傾
 一滴四川何日返 夢魂惟遠武林城

義鎮は次々と第三次の派遣をしたが、対明貿易に多大の期待をかけたいた事を想見する。庇を遣う者は山を見ず、で余りに性急であつたが為めに結局徒勞に帰したに止まらず、損失を招いたように見られることは遺憾の事と謂おねはならない。

(おわり)

書翰

佐伯と北川の關係

宮崎市

牛倉家貞 沢

武

人氏より

海集子に寄せられた私儀でありますが、短中にも多くの研究示唆が含まれていますので掲げて、会員の参考になれば

供します。但し文中北川とありますとこの北川や延岡も考へ高千穂推葉史の日向全域に張つて、沢氏の言わんとするとこゝで誤りかまらう。
(附録)

(前巻)

佐伯と日向、もつとしぼつて佐伯と北川の關係を思ふのです。

北川村は且て川内名村と長井村に分れていました。私の村は長井ですが、小學校の頃から川内名の友人のことほか、私たちと違ふことと愛に感じていました。今考えて見れば、アグセントやイントネーションが佐伯のことになんです。これは現在でも北浦村あたりは強い類似を示しています。

これはお互に考えて行かぬばならない点と想います。國という制度がなかつた古代のこと。宗太郎、梓山の陵とは、人的政治的道の調通によつて生まれたものに過ぎない。庶民の歴史は政治と超越する。この点ももう少し掘り下げたいと存じます。そしてそれが民俗學であると思ひます。

(後巻)

(附記)

昨年三月建設会が高千穂に参りました際、御茶屋御宿等と預いた沢先生は、今春高千穂高校からの宮崎の県教育庁に御挨拶、先日宇佐郡佐田村出身の本草堂者賀来飛霞の事蹟調査に来られ、飛霞と交りつた秋月橋門その他資料と求めて佐伯に下車、その御来訪とうけました。

尚沢先生からはいれまで北川村史、北川村郷土史料、高千穂郷土史料等、御研究の貴重な資料を預けています。感謝してあります。會員の御利用を希望してあります。

史料

鶴屋城の沿革

(上より鶴屋城史による)

年号	紀元	藩公	城
慶長七	一六〇二	初高政	城のできごと等 近江安土の人市河祐定東下臨ふ。祐定は織田氏の遺臣にして城郡經受の術に長ず。時に公新城の意あり、因つて召して其の方略を伺ふ。甚を之を嘉す。郡部の方圓、城壁の曲直、皆祐定に走つる所を用いしなり。城成り、祐定辭去す。
〃 九	一六〇四	〃	相て壘屋八幡山に城す。会々白鶴群衆す故に号して鶴屋城と白ふ。一説に山の形鶴の翼を散るに似たり故に名づく。
〃 一〇	一六〇六	〃	佐伯の築城成る。公歴を移す。中城、郡部二郭、西郭、北郭、天守閣、望樓、櫓橋、皆備はる。慶長八十九間、袤十三間、周圍三百三十三間あり。
元和三	一六一七	〃	六月廿五日佐伯藩二郭の齋舎火し、文書什器多く焼す。
寶永一四	一六三三	三高尚	是の年佐伯藩三郭の創築成る。
延享七	一六七九	四高重	十一月 佐伯藩三郭の書院、玄關、料理間を増し造り、南大門成る。
元禄一四	一七〇一	六高茂	十月十五日初めて太鼓と鶴城第三郭樓門に夜し祭け、以て時刻と報ずること故に如し。
宝永六	一七〇九	〃	五月 公徳教を修し其の田趾を圍らんと欲し、幕府に上りて以て允許を請う。西名廻山城口上り之を提画す。
享保九	一七二四	〃	九月 新造に南大門を造りて成る。
〃 一四	一七三九	〃	四月鶴城の修造成りて、櫓橋、櫓壁悉く旧制に復す。唯天守樓を設けず。置酒して慰勞す。総奉行小林師能以下役員の録を和ふ。
寶延二	一七四九	七高直	七月佐伯修城落成の式典を挙ぐ、宴を解